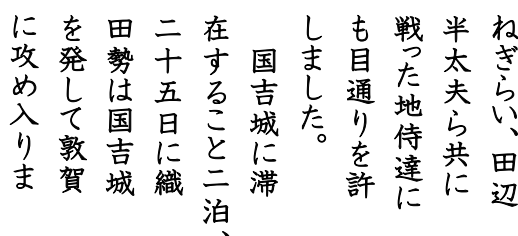


一、「金ヶ崎の退き口」家康、美浜に来る！

永祿十一年（一五六八）、若狭国守護武田元明は、朝倉氏によって一乗谷に連れ去られ、若狭は守護不在の無主状態でした。実質、朝倉氏の属国と化しましたが、国吉城主粟屋越中守勝久（近年は「勝長」が実名の説あり）をはじめ、武田家臣団の多くは朝倉氏の支配に抵抗しました。

結果、將軍の命に服さない若狹の武藤氏討伐（実は朝倉氏攻め）と称し、永祿十三年四月二十日に京を出陣しました。『信長公記』によれば、琵琶湖西岸を北上し、二十日は和邇、二十一日は高島郡田中に宿泊、二十二日は若狹国に入つて熊川の松宮玄蕃の屋敷に泊つたと伝えています。熊川では、若狹の諸將がうち揃つて出迎えたといわれます。この時、徳川家康は熊川の得法寺を陣所としたと伝わり、近年まで腰掛けの松が残っていました。

国吉城に入城した信長は、勝久に対し多年に渡る朝倉勢との戦陣の労を



いよいよ木ノ芽峠に向かおうとした矢先、妹婿にして北近江の領主であった浅井長政が、織田勢の背後を襲おうと進軍中との報が入りました。信長は、少数の供廻りのみで若狭に戻り、朽木谷を越えて四月三十日に京都に辿り着きました。各武将が率いる部隊も順次退却し、退却の最後尾を木下藤吉郎、池田勝正、明智光秀、そして家康が率いる各隊が担いました。『太閤記』では、木下隊のみが殿軍として奮闘したように記していますが、実態は複数の隊が担いました。また、織田方の最前線として国吉城が健在であったので、織田勢は敦賀から国吉城までの十数キロを逃げてくればよかったのです。

実は、家康が越前攻めに参加し、殿戦を担ったという記述は、江戸時代以降に記された『三河物語』や『東遷基業』など、家康の業績をまとめた二次史料（後世の史料）ばかりで、一次史料（同時代の史料）には出てきません。しかし、美浜町内に関わる伝承は意外に多く、「来なかった」とも言い切れないのです。



「徳川家康」伝承がある美浜町内の地点位置図

二、家康の足跡、町内に残る史跡を辿る

(一) 徳川家康公ハ別所二陣ヲ取ラセ給フ

軍記『国吉籠城記』諸本には、織田信長の国吉入城に従い、徳川家康がやって来たことが記されていますが、本により陣を置いた場所の表現に若干の差異があります。

例えば、『若州三瀧郡佐柿国吉城合戦記』(元禄五・一六九二年写)では「徳川家康卿は金山村の南、別所に陣を取らせ給ふ。」と具体的に、『若州三方郡佐柿国吉籠城記』(寛延四・一七五一年写)や『若州三方郡国吉籠城記』(天明七・一七八七年写)、『国吉籠城記 全』(嘉永七・一八五四年写)等にも「徳川家康公ハ別所二陣取り」とあり、『佐柿国吉籠城軍記 全』(天保十三・一八四二年)では「徳川家康公ハ別所カ原に御陣ヲ」とあることから、現在の金山から久保、別所付近に広がる原野に陣所を置いたであろう事が窺えます。

一方、『若州国吉騒動記』(享和二・一八〇二年写)では、「別所」を「別場所」と解釈したようで、「徳川家康卿ハ誨二隨列二陳所ヲ為取賜。」とありました。

田辺宗徳入道(半太夫)が実体験を元に記した最初の『籠城記』である『国吉城之記』、あるいはその初期の写本を読んだ後世の人々が次々に書き写す中で、筆者の解釈、捉え方で全く別の意味になることがあるわけです。一次史料ではない事や、他の伝承等も踏まえれば、別所(別所カ原)説も可能性の一つに留まらざるを得ません。



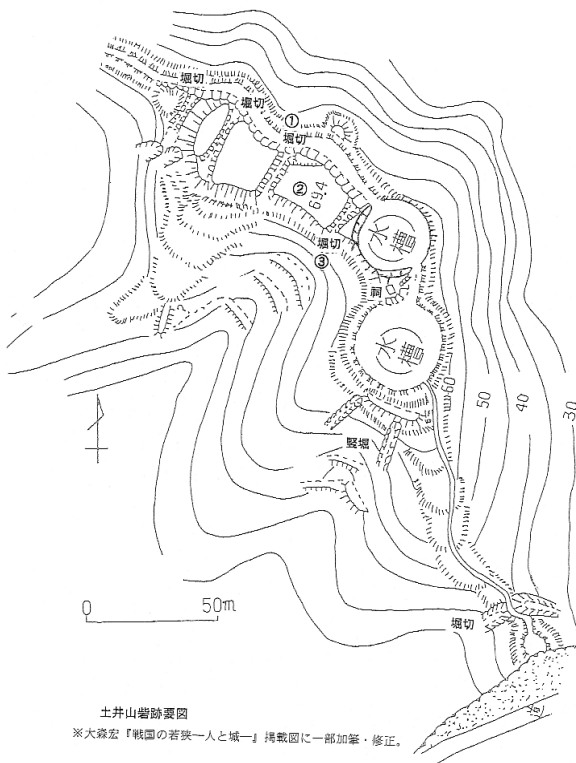
軍記『国吉籠城記』諸本に登場

(二) 土井山砦跡

土井山砦は、国吉城の出城と伝わり、耳平野西端の独立丘陵北部(標高六十九・四メートル)に位置します。北側の麓を東西に丹後街道が通過し、丘陵の西側には『国吉籠城記』諸本に出てくる徳川家康が陣を取ったという列所の原野でした。現在、北麓の五湖の駅に説明板があります。

城郭の中心部は、町の給水タンク建設時に破壊されてしまいましたが、堀切で区画された連郭式曲輪群の一部が残されています。また、西側斜面に豎堀状の痕跡があったといわれますが、現在は視認できません。南側尾根筋とは堀切で分断され、土橋が渡されています。尾根西端南面に複数の削平地群があり、大森宏氏は「土井山西砦」と名付けていますが、城郭遺構とみるかは検討の余地があります。

また、大森氏は、金ヶ崎の退き口で若狭国まで退却した木下藤吉郎は国吉城に、徳川家康は土井山砦に一時立て籠もったという伝承があると、『戦国の若狭』(一九九六)に記しています。



土井山砦跡要図

(三) 家康、秀吉と国吉城で囲碁に興じる

「古老から聞いた話として、昔、国吉城の本丸に平らな大石があり、織田信長が国吉城を訪れた折、随行してきた徳川家康と木下藤吉郎が囲碁に興じた石だということです。」(地元佐柿出身者からの聞き取り)

つい最近まで、本丸跡に登ってみてもそのような大石は見当たりませんでした。したが、平成二十五〜二十六年度の発掘調査で、北西虎口跡から平らかな大石が出土しました。この石は、栗屋氏の後に城主となった秀吉重臣の木村常陸介定光が城を改修した際に置いた「鏡石」が倒れたものとみられますが、後世、このような大石を城跡で見た人々によって、そのような話が広まったのかもしれない。



発掘調査で出土した国吉城本丸北西虎口跡と鏡石

(四) 徳川軍、黒浜で朝倉の追軍と戦う

(『東遷基業』よれば、)「家康が金ヶ崎より軍を引いた時は、朝倉の追軍と黒浜(佐田の海岸を砂黒きため、この様に云う)に戦い、かねて先鋒をして戦い破れて丹生に逃げ、再び此の合戦に出て来た木下藤吉郎の一命をこの一戦に於いても救い、藤吉郎に厚く感謝せられたと云うのです。」

(『山東村の歴史』一九五〇 長者尚徳)

同書には、佐田

下田で得たという
赤錆の小刀について
の記述があります。
「私も佐田田辺善
作氏が佐田下田に
て得たと云う赤錆
の曲れるボロ小刀を
得たが、平打(ち)、
血みぞ(溝)なし(へ)、
そ(反)り弱く、つば
(鏑)の彫(り)幼稚
にして時代が合致
するからこの合戦
に用いたものと思っ
ている。」(〇は意味
が通るように漢字、
送り仮名追加。)



黒浜(現・今浜付近) 遠望

(五) 徳川家康陣跡(松原・久々子)

美浜町松原と久々子の境辺りにも、徳川家康の陣所があったという伝承があります。『東遷基業』によれば、佐田黒浜で木下隊を救った後、後退して陣を張った場所とされます(「縫路を取て帰陣すべしと、所の案内者を先に立て、木野を通り、松原と云処に宿陣ありける」)。

『目で見える美浜の文化財』(一九八〇 美浜町教育委員会)には、巻末の「美浜町指定文化財一覧」に、「史跡 徳川家康陣屋跡 松原」とあるほか、旧西郷中学校付近にあった「徳川家康陣跡(久々子)」の碑の写真が巻頭に掲載されていますが、現在、碑は失われています。



西郷中学校にあった徳川家康久々子陣跡碑

『目で見える美浜の文化財』よの転載

三、終わりに

国吉城は、二年前の大河ドラマ『麒麟がくる』に登場した事で知名度も全国区になりました。今年の『どうする家康』に再び登場するかわかりませんが、今後「ゆかりの地」としてPRしていきます。

【美浜町教育委員会・若狭国吉城歴史資料館】